

# 武德成業

四十五

|      |           |
|------|-----------|
| 内閣文庫 |           |
| 番號   | 和 15251   |
| 冊數   | 63 ( 45 ) |
| 函號   | 150 12    |

|      |   |   |      |
|------|---|---|------|
| 内閣文庫 |   |   |      |
| 函    | 架 | 冊 | 號    |
| 九〇   | 四 | 三 | 五二九一 |
|      |   |   | 和書類  |

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TMI: Kodak





武藏成業卷之四十五

同月十三日第二

政仁

天皇御孫

高直子孫

經綱

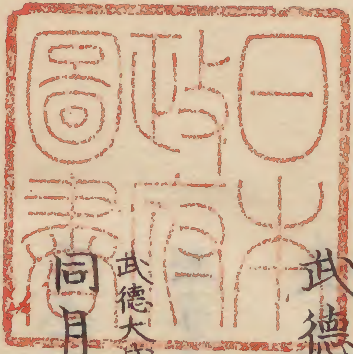
給了親

信





武德成業卷之四十五



武德大成

同月十二日第二

皇子

伯耆守加藤正脩編

淺草文庫

政仁 後水尾院 親王卜成

母ハ近衛信尹ノ女也

天皇御寵愛ニシテ

帝位ヲ讓リ玉ハント思召ヌ然ル是ヨリサキ中山大納言藤

親綱カ女ノ産スル第一ノ皇子良仁ヲ菊亭右大臣時季奏シ

請テ親綱及德善院玄以下議シ大閤ニ告テ親王トス是ニ依

テ



天皇其夏ヲ遂ケ玉ハス此頃近臣ヲノ密ニ

神君ト讓

位ノ夏ヲ議玉フ

神君兼テ良仁ヲ親王ニ定ニテヲ宣

カラス思玉フニ依テ曰子ヲ知ハ父ニシクハナシ古今貴賤

皆シカリ我モ又男子多シ能嗣ヲ定ルコト我心ニ在耳第一

第二皇子皆

天皇ノ王胤ナルトキハ位ヲ讓玉フ事敵慮ニ任スヘシ殊ニ

第二ノ皇子

母儀貴キトキハ

太子ニ立

玉フヲ宣シカルヘシ

天皇悅玉ヒテ事決定シ又

天元實記

今度凶流乃而、嗣王と云、其ノ系表軍忠其ノ如流大者、

中ノ王ハ其ノ色信結城之河守也、我前ハ其ノ平下野也、

一尾張也、其人其ノ如、其ノ代、其ノ如、其ノ如、

其ノ如、其ノ如、其ノ如、其ノ如、其ノ如、其ノ如、

り

武徳大成

神君并伊直政本多忠勝神原康政本多正信大久保忠隣ヲノ

台徳公ニ問テ曰關國ヲ諸將功有者ニ授ニトス先御居城定

メ玉ニトス關東ヲ本城トセシカ 台徳公曰我何ヲカ

シラニ國ヲ治玉ヒ民ヲ理メ玉フノ宜キ所ヲ以本城トシ玉



フヘシ悉ク盛慮ニ任ス  
神君大ニ悦テ江戸城ヲ定メ  
テ御本城トシ秀頼ヲノ大坂ニ居ラシメ河内摂津兩國ヲ寄  
附ス越前國ハ三河守秀康尾張國ハ松平下野守忠吉播磨國  
ハ池田三左衛門輝政美作備前兩國ハ筑前中納言秀秋安藝  
備後兩國ハ福嶋左衛門大夫正則出雲隱岐兩國ハ堀尾帶刀  
吉晴及其子忠氏伯耆國ハ中村一學忠一  
此時松平氏ヲ玉フ  
伯耆守ト号ス筑前國  
ハ黒田長政豊前國及豊後國木築ハ細川越中守忠興紀伊國  
ハ淺野左京大夫後ニ紀伊  
守ト号ス幸長土佐國ハ山内對馬守一豊若狹國  
ハ京極宰相高次丹後國ハ京極修理亮高知筑後國ハ田中兵

部少輔長正伊豫國ハ加藤左馬助喜明松山城ニ居リ藤堂佐  
渡守高虎今張城ニ居ル各十萬石ヲ増加シ肥後國ハ加藤主  
計頭清正阿波國ハ蜂須賀長門守至鎮讚岐國ハ生駒讚岐守  
一正肥前國ハ鍋嶋加賀守勝茂飛騨國ハ金森法印長近因幡  
ノ取島ハ池田備中守長吉丹波福智山ハ有馬玄蕃頭豊氏美  
濃國高須ハ徳永左馬介昌重備中ノ庭瀬ハ戸川肥後守達安  
ニ玉フ且美濃ノ郷邑木曾ノ群士ニ分テ與テ戸田一西ヲノ  
大津ノ城ノ牆壁ヲ修補セシメ松平忠頼ニ美濃ノ金山城ヲ  
守シメ一万五千石ヲ城領トス武州松山ノ本領元ノ如シ戸



田高次ニ越前丸岡城ヲ玉ヒ内藤信成ニ羨濃ノ岩村城ヲ守  
ラシメ小堀正次ニ一万石ヲ授ケ與ヘテ備中ノ松山城ヲ守  
ラシム是ニ於テ衆皆安堵ス政務ノ餘暇足利ノ僧三要ニ會  
ノ孔子家語武經貞觀政要ヲ開板セシメテ闔國ニ流布ス江  
戶増上寺ノ住持存翁大坂ニ至テ天下一統ヲ賀シ奉ル  
神君是ヲ大坂ノ西城ニ召テ其法門ヲ聽玉ヒテ茶壺ヲ授ク  
其後三成以下逆賊ノ藏ノ貯ヘル茶壺ヲ累代ノ御家人ニ分  
テ賜フ

私云前より法將ノ傳世より集む

勇士一言集

甲州浪人小堀正次一と云者多かりといつた此合戦の首多く居たる  
者之去事と并得多の度守及ハ抱ク小村戸塚左衛門と云者一ハ抱  
以事々々出守用と云ハるる有友友と云ハるハハ首ハ抱ク  
きうよて多く居る者一ハ侍者此事合と云おられぬ  
多ク事ハ首と云ハる多クハと云事ハける多の度守及  
イヤまハハ若きときハ首と云多クハ若者ハハ此れなる  
一段と能者なりと云抱クハハハハ

明良洪範

黄門秀康卿ハ永見志摩カ女ノ媵ニ生サセ玉フモ受庄助一  
門也天正二年二月八日遠州有富養村ノ産也本多重次御前



伺公ノ所へ母公抱テ御子出生ノ由ヲ申レケレ凡 神  
君御疑思召ヤ有ケニ御承引ナカリケレハ重次申ケルハ戰  
國ノ間イカホトモ御子ノ在コソ能レヨク似サセ玉フトテ  
養育シ奉ル御對面無リシヲ 信康ノ御取扱ニテ六才ノ御  
年御父子ノ御定在シ也十四歳ノ御時薩列岩シヤクノ城秀  
吉公攻玉フ時寄衆ニ加リ玉フ處ニ先午ニテヌスミケレハ  
御午ニ合セラレサルヌヲ無念ニ思召テ泪クニセ玉フヲ人  
々モ是ヲ感ス右ノ様子ヲ秀吉公へ吹調シテ 家康卿  
ニ御勇氣似サセ玉フト云へハ秀吉公イヤソレハ吾養子故

吾ニ似タリト宣フ十七歳ニシテ結城左衛門督暗朝ノ家ヲ  
繼セ玉フ始ハ秀吉公ニ養レ玉フ后結城ヲ純慶長五年ニハ  
上杉景勝ヲ押テ江府ニ殘玉フ同霜月ニ越前ノ福井ヲ賜ル  
同十年四月十六日三位中納言同十三年閏四月八日三十四  
歳卒去孝顯院ト号ス束帶ノ像ヲ寺院ニ納后 神君命  
ニヨリ淨光院ト云新地ヲ開テ淨光院ト謚ス

續閑談  
中納言秀康ハ清壯年ニシテ清純物氣ニシテ久シク此を醫療  
術ニシテ使後ニシテ病後ハ此礼ニシテ登城ニ赴キ中納言上  
清之印此清機姫ノ色ハ清奔乞此品ハ作身高自カ成リテ



此例の元は秀康面脚と云若くは向より是は此例の元  
去来は痛もりか出まふは為付ひより中上尉は此氣を換へて  
此氣は此後には冬に寄る今日登城大業として接樂と申付餐  
應の用意なりと云我々の用意する所は友対面之痛く取  
端と付く大ききは此情ある申各付作天一秀康は中何付  
り是れと云友魁角清退は家人おもあは心脚之凌りよ上意  
有りける我亦久く此を對面友付付も亦く對敵と云はる  
あつちつちつと先日の色は此根脚よていふ及も後とのくも取  
秀康今度の様よく鼻換へて見苦あつちつちのい我兼て

初れ此の物より先日の鼻の神能見申は此ことと云業と付た  
と云痛くする様物なる事と云業付たよと云及と鼻形見苦あつ  
初ちて此の度秀康よと云此合事之男其容貌と云事一ハ  
公家町人の事一人間の如くとお多しと云と目の如け出度も  
此の如むりも多し此指の度のおの候もと云角一痛氣な  
是ハ何の如くするに云一一方の如く秀康程のと云の  
鼻の形と云かかると云ひと云業付する候の如くは  
家康此是よおぬと云と云人令お骨や膝の者た下  
是と云つる事と云けと云と云中尉と云中尉此の目限と云作



此の夜に中津進りては秀康の討つ中津忠孝とて中津  
勢を中津登城とては別は忠孝は池谷忠孝とて切れ  
中津具をとりては中津とて

老人雑話

江戸ハお相亡ハ後子誠希の黄門番ハお相亡ハ一百万石西條也  
誠希の家の子小島木勘平とて誠希代者何れ新系  
者ハ一百万石所をとりて忠孝とて誠希江戸ハ後子遍り  
聞て之上方ハ誠希といふやとて忠孝ハ忠孝とて江戸言  
之上方ハ誠希といふ人ハ誠希者といふ忠孝とて世傳極此  
松本所ハ忠孝とて忠孝とて忠孝とて忠孝とて忠孝とて忠孝とて

かきし御とて忠孝とて忠孝とて忠孝とて忠孝とて忠孝とて  
武功多といひ忠孝とて忠孝とて忠孝とて忠孝とて忠孝とて  
といふ人ハ忠孝とて忠孝とて忠孝とて忠孝とて忠孝とて  
能く忠孝とて

明良洪範

下野守忠吉御母ハ

此間一行カケタリ追テ加入セニ為ナルカ

美男關ヶ原御初陣御手負ハレ直取ノ高名アリ慶長五年十  
月五日尾州清洲城御居城ト定ラル同十二月三位中將江府  
芝ニテ卒去御病中御別ヲカナシミ御使掃ノハヲ引カ如ト  
云細川忠興妻ニ付置所ノ福富喜太夫奥方大坂ニテ自害ノ



時ニ場ヲハワレタル故ニ忠興念ヲ殺シト云忠吉宣ヘルハ  
彼ハ今鉄炮天下ノ名人也武勇ヲ取ハコソ藝ヲトリテ誓古  
スルモノ、為ニ助ケ置レヨ藝ニ臆病ハ付ス故今殺ハ一流  
断スヘシ残念ナラスヤト宣フ故忠興念テ押死刑ヲ許ス后  
一夢ト云大坂御陣ノ時天子ノ二重目ヘ大筒ヲウテタル人  
也武勇知仁無並良將ト云ナリ

古人物誌

池田輝政愛宕信仰也ニハへ死タル鳥ニツ落タルヲ殊ノ外  
氣ニカケ果シテ死去 神君被仰ケルハ死タルカ不便

也總別愛宕ナドヲセ、ツテ天下ヲトラル、物ニテナシト

仰テル後ニ天下ニ心アリタルヲ知シメサレ、ト見ヘテ如

此上意ナリ

感狀記

池田三左衛門尉輝政ノ家禮伊庭總兵衛ハ手前中リ矢業氏  
ニ勝レタル弓ノ上ナリ輝政參州吉田ヲ居城トス

源君ノ婿トナリテ御輿入時諸士今切ニ出迎ヘ伊庭弓ヲ持  
セタリ輿副ノ人使ヲ以テ人多キ中ニ獨弓ヲ持セラレタル  
ハ承及シ伊庭殿ニテヤ候ト問フ御尋ハ何故ソ伊庭ニテ候  
ト答フ又以使サテハ此洲崎ニ羽白一番淳テ候願クハ一矢  
遊ハサレ候ヘカシ見物仕テハヤト云フ伊庭難議ノ所望カ



十兩家ノ諸士ノ前ニテ遠慮アルヘキ事ナルヲト心中ニハ  
思ヒナカラ心得候ヌトテ矢ヲツカヒテ前ヨル其間三十間  
ホトニナレハ羽白漸ク沖ニ出テ遠ザカル伊庭満引シ餘リ  
久クタモテケレハ是ハイカニト見ル所ニ志ル、バカリア  
リテ放ツ矢其雄ノ胸中ヲ貫キ其雌ノ尻ヲ射切タレハ兩家  
一同ニ響ル聲海濤ニ響所望シタル人其矢氏ニ羽白ヲ請テ  
取テ歸レリ伊庭カ友何トシテシホヌケスルホドハ不放ヤ  
ト問ケレハ同ハ番十カラ射ニト思ヒ相並ヲ待タレ氏終ニ  
不並少シ并フヤウナルヲ幸ニ放テ候故番十カラ射トテ

残念ナリトテ語りケル伊庭鉄炮ト争ヒ夫モ玉モ十二テ小  
鳥ヲ射ルニ負タル事十ニ結立タル卷藁ニ左ノ拳ヲサシツ  
ケ強カラヌ弓ニテ射之厚ミ一寸バカリノ裏板モ透ルバカ  
リナリ放シ殊ニヨキ時ハモトユヒ其勢ニハラリトキル、  
事度々アリ灰ヲカキ擧カハラケヲ立的小ニテ射之ニ貫之  
テ土器ノワレザル事モ又度々ナリ鳥ヲ射ルニ弓ヲ引設ス  
ラミト歩ミヨリ羽ヲワラントスル時歩ナリニ足ヲ不止放  
ツニ外ル事ハ鮮シ強カ壯碩時人ニ知ラレタル男夫也

福嶋左衛門大夫正則安藝備後ヲ召放タレ信濃ノ川中嶋四



萬石ニテ左遷セラル、時正則江戸ノ屋敷ノ四方ヲ透間ナ  
ク圍テ若異儀ニ及ハ、忽チ撃ツブサントス此時卷説區十  
レハカケ落シタル者多シ耻アル士ダニ如此ナレハ下僕ハ  
皆行方シラスナリ又後藤左兵衛熊沢半右衛門等汲炊ヲツ  
トメテ膳ヲ具フ正則切齒テ鬪死セント欲ス熊沢諫テ曰臣  
等御供申テ突テ出タリ氏ヨキ敵ニモ遭ガタカラシタバ雜  
卒ノ午ニカ、リテ見苦キ死ヲセサセラレハ武將没後ノ玳  
タルヘシ臣等直層ニテ腹切ヨリ外ニ道アルヘカラスト正  
則怒ヲ抑テ從之然ル所ニ墨付ヲ以テ廣嶋ノ城ヲ子細ナク

渡ル、ニ由テ死ヲ省テレ又林新右衛門ト云者アリ正則ノ  
息女ノ傳ナリ正則ノ前ニ出テ圍者亂入候ハ、早ク御自害  
可然拙臣此ニ候ヘハ奥方ノ事ハ御心ヲ煩サルヘカラスト御  
从借仕リ皺腹ヲ割テ殿閣ニ火ヲ放テ跡ニテ人口ニ毀ラレ  
サルヤウニ可仕候ト云後京師ノ傍ニ幽居ス右ノ義ヲ高シ  
トシテ以豊祿招ク大名アリ林承引セス我年七旬ニ餘リ候  
ヘハ今ハ世ニ望ミナシ殊ニ召出サレントノ事ハ正則身上  
相果候時ノ一事ニ由テ也サシテ義ヲ守リタルト申ホトノ  
事ニ非ス縦ヒ拔群ノ功ニモセヨ老體手足進退不自由ノ身



ニテ一本鎗ノ者明日何事アリトテモ若者氏ニハ遠ノ者リ  
ニテ候然ルニ高知ヲ貪テ微命ニ從ハ我心ヲ欺ニテ候トテ  
終ニ仕ヲ不末友人諫之テ所言ハ尤ナレ氏一ツハ子息ノ為  
ヲモ顧ラレヨト云林我子共ノ爲ヲ顧ル事人ニ異ナリ身ニ  
應セズ高知ヲ取ハ耻ヲ招クノ本ナリ人ノ禍ニ是ヨリ生ス  
ル事アリ位牌知行ヲ取セテ分ニ過タリナト人ノ口ニカケ  
ニハ子ヲ愛スルノ道ト云ヘカラス其上我浪人ユヘ子共小  
知ニテ各主君アリ立身ノ為ニ暇ヲ請セシモ大ナル貪欲ナ  
リ人皆余分アリ禍福ハ人意ノ以テ奈何共スヘカラスト云

テ不從林夕、危ヲ見テ致命ノミナラス能義理ニ通セリ誠

ニ此ヲ俊傑ノ士ト謂サレヘケニヤ

武家閑談

村上彦左衛門尉通隆ハ豫州赤松出雲守通康將居赤松馬  
ノ背ノ大割ノ名ヲテ十段ノ初陣ノ豫州主生川ノ味  
方敗軍の時彦左衛門只一人出テ合少ノ斬ノ立止  
多クハ一門村上三年信節ノ助出テ其の時彦左衛門槍を  
合敵と實出テ一軍ヲ掃テ其時彦左衛門の功の徳徳の  
下津井方々ノ多物討テ信長公赤生寄の時豫州目言  
の敵ノ多物討テ多連河ノ人後年福徳の事



お仕りりり 台徳公が福徳順知は百段廣徳の城

清和の太軍とては是向廣徳為城の時侍有妻とて是  
欠為すは福徳丹波の實を見番致直とては其妻のたよ  
折つと欠為すはと丹波何とてくく欠為の業は是  
よせんとい村上彦左衛門とい何とて丹波に侍ありて  
欠為成清若骨よと女とて丹波とい人少ふあり  
為成は世傳ふすといの事よといと云彦左衛門とい  
笑ふとて引文何とてく合戦で女は迎成の者  
そ色よてけ村上彦左衛門丹波名代は清彦といふとい

一

切後仕の如く主君の御守りとて立申は後にも主君侍者  
足由といひは皆為る後よとては成の物をきき人後と切  
西別の御下はは世傳ふといといとて此氣をいふとい  
丹波とい退せや度といふとい

續閑談

権現様福徳の意のまゝに物前とて人致並一同は何程  
そと中君の時物前とて人並定りたる事いふ記の  
彼定りたる事いふ記の  
心のおられぬ者致くさうとい友先ん記すとい  
う先ん記すといふとい







一人モ残ルレシキト也總テ横田ト彦左衛門ト高天神ノ事  
ニテモ口問答ヲシサイ々ノ事ナレハ彦左衛門又甥ノ大久  
保主膳異見ヲ云横田ト出合ノ時ニハ口論ヲナサルイテサ  
ル事ト云イヤ々我ハ不構横田申カケル故ニ申也此頃ハ此  
方ヨリヘルトイヘリ主膳申サルハイヤ々御年ヨラレテ  
モヘリ言葉ハ聞ニクシ御ヘリ候事ハ御無用只口論ナキ様  
ニト云是ニテツルカリソノニモ云ニシキ事ハツ、シム  
ヘキ事也永井日向守モ其座ニテ親ク聞ト申サル

岩洲夜話

福徳在唐ノ事其別安藝佐後直冬と津成ト入部ノ沙汰は

上ラノ時家老三人の者ナリ自見は佐後直冬ト云一番沙汰佐後  
神多ノ城ニ福徳直冬<sup>イ後</sup>ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後  
尾関石見是ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云  
片貞成<sup>イ後</sup>直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云

是レハ兎ハ性流の中ニ場ノ善ク善ク善クハ出せ人ノ事  
右沙汰直冬<sup>イ後</sup>直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云  
直冬<sup>イ後</sup>直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云  
そや直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云  
直冬<sup>イ後</sup>直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云一<sup>イ後</sup>番沙汰佐後直冬ト云



ふ果ぬんも斗りかこし一そ上只今の三人ハ皆く武着場殺  
おとこ何り大割の武士たりまふし一也福徳の家傳より之  
身と侍りまふねく家老と経より脱し  
家康の弟

一福徳一礼と侍ると云い武士代名守なましたる侍りしと津山  
りやうり度と思ふふ何し一おう一紀事ハ何れもまふし何れも  
思ひぬ多割か事起るそ只今のしこく多ハハ出りて  
あり其是候そに成人とまるとそも世守ふ名代何れ  
の事ハなうし一かこし一想し一く武士ハ生きたる人ハ  
このよめと合点と家老福徳に武着場ハかせうまぬ物成りて

能く多割仕りまふと侍りまふ二言り同侍儀姫君く

清澄はぬりて

勇士一言集

福徳夫妻内少も陸奥無一といひ一記りの何り一陸奥ありと  
すく腰振く立向う行事なすぬ程之物まふも武着場そ  
武功をく天下小隠なり一福徳夫妻度遠流の後方より  
高知のよめをそめきりたり

福徳左衛門夫妻度家ノ藤の女流といひ若きりりまふ  
立身の人さしもまふし一ひまき一信の物といひちり  
り候まふし一理ふ南軍ナ多うりりり一武付軍法者の











お中望の御下と上意にて比の振子並存申上意申  
揚部氏存御下申上意と申意より申上意申  
申上意申上意申上意申上意申上意申上意申  
揚部氏存御下申上意と申意より申上意申  
福徳吉史と是は名京部より申上意申上意申  
御下申上意申上意申上意申上意申上意申  
下意申上意申上意申上意申上意申上意申  
御下申上意申上意申上意申上意申上意申  
可申上意申上意申上意申上意申上意申上意申

一

愚意代るとは存御下申上意申上意申上意申  
御下申上意申上意申上意申上意申上意申  
申上意申上意申上意申上意申上意申上意申  
申上意申上意申上意申上意申上意申上意申  
申上意申上意申上意申上意申上意申上意申  
申上意申上意申上意申上意申上意申上意申  
申上意申上意申上意申上意申上意申上意申  
申上意申上意申上意申上意申上意申上意申  
申上意申上意申上意申上意申上意申上意申  
申上意申上意申上意申上意申上意申上意申  
申上意申上意申上意申上意申上意申上意申  
申上意申上意申上意申上意申上意申上意申



取捨ゆみつが、一附少初軍と中後少産のり及以  
き方と何方とて可ひ中ととみ存と於沖前同善と其  
台徳院様は中台の端々是等自は後うつを以  
たりて分得りとの沖産とて各退出仕事

井上正氏とて沖産は其れと明細未成子掃部代等城  
は少く在りし沖産は其れは通しり流しとの上よりて忠孝は  
思ひに合付昌れ少後人合事都鄙少中院其少法信少院  
密の儀と其事との連産は其れ加りし後自少沖産法少に  
之少一人のふとんと思召無社の惣勢と少細く聖自未成子登

城少別持事の如しと正氏後少義つと違ふは少沖天書其  
少少少産の向の少縁とて其れ少少少同少其主牛及のた  
りとして少少少の少とて少中一尺産少血判と其少年及  
少後一少少少少の少少少少少少中一少色夜前別少思業  
ハ少少少少少と少少少少少ハ忠孝は信上少ハ明少中一少通  
其れ、少少少り少少少少少産のよう一と少少中一少ハ内、  
掃部頭少少少少思召少ハ少何も連産少との有てん  
少少少少中一少少少少は少少少少少少少少少少少少少  
通り少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少少







と云く功成りんと云ふ事と此中其の助志馬の付て云く  
陰ともや御ある大功の従志れり感一り

馬田長政 初甲斐守 後筑前守 檢田某の時播磨三年の歳に初陣の事

名より度々の武功不可勝量度長六年 津南家子

より筑前の西成相願を柞南五輪屋の孫子新加々此

大原神系元佐若大原神の荒魂神代の昔より結度の

社 拾別の位者 和魂なり 津社西に向く是城と拒さゆかの表也

御より右左相頼朝多々此神田と寄附せしと云頼書

寄進状未今尚津友の津子御より津社宏羅申て

は尚の多礼御人なり一は慈仁以事此初礼より百十

一人の初友を教ふ一津社も願廢よ及ひ一と長政余

一々此神々或人の御よ多教一中朝の武威輝く

魚子事と行りも一ん一とて若于此今城と以て

造管一きりぬ又因那香椎の事

仲哀天皇此津廟よ一一度

神功后多此津徳ハ仁より一と云く長政是とも云明

と云

神功后多此津徳ハ仁より一と云く長政是とも云明



武の神祇之古也

朝廷より將軍ありしより之を伊豫あまの徳にハはる位何  
はく神田美千子とて之中此大系夥しかりしとも是も  
大友統造もよかりしとて御く七百所の神祇ありしと  
大園秀吉九列一統の時又神祇とて没收せしと神事系  
禮も段果んとせしと小早川隆景も尚由と賜り本社洋  
殿と再興し百世所の田成等附せしと之形半も油の  
一成利も長子令を秀秋悉く是と止む是八神人  
初及遍く油の百の皆田史と書しぬ奉府の天海天邦ハ

文庫の神廟神史並陰行したる事世の初る所是も  
本社法孫とてしし神領莫大なりしと成礼世子頼博  
形半ありしと長政是と慈く丁寧しし御言し神  
田成もせま礼と傳りしとせ誠し本朝の道と能き  
かこり人々事と 神祇 台徳公も此秘あり  
しと事んす積善此徳を以て孫能きしはく由成治先  
光之徳政尚由の太社此礼と傳し一層是よりと  
真し好むとせしと

武家閑談  
黒田長政常子行りしに我十世の時よりとありし



高名多物成りよなりも如きは子にまじりて人をも稱賛  
世に海野幸長ハ天下の上下を勇者と譽はる父洋正  
分別を先に行ふより天秀邊の武邊なき故を子にまじりて  
以て名を以てし

老人雑話

黒田如きは病きて死前三年自年の日法長と名を罵り  
辱む法長怒りて甲く病を治すに法長は神に別子  
いさむ命を人にもしりて命を法長にまじりて命を如きは  
の命を法長にまじりて命を法長にまじりて命を法長に  
まじりて命を法長にまじりて命を法長にまじりて命を法長に

一ハ是も如きは為るれんよ何れ法長子何れ法長を

法長如きはの代よなまじりて命を法長にまじりて命を法長に

明良洪範

黒田長政 筑前守

先祖ハ播州多賀郡黒田ノ郷ニ小寺下野守重

隆ト云赤松ノ旗下有リシ其子義濃守誠隆天文年中迄ニ近  
御ヲ頼ヘ邑長タル輩ヲ十七ヶ、ル故近邑小寺ヲ將トシ敬  
ヲ嫡男祐隆カ子ハ小寺官兵衛孝隆如永ト秀吉公ニ仕ヘ播州  
守護タリシ時ヨリ秀吉公ニ屬メ戦切アリ今ノ姫路ノ城モ  
官兵衛見立テ秀吉公築玉ヲ秀吉公孝隆相談ノ繩ト云モ虚  
説ニ非ス薩摩陣ノ右豊前一國ヲ以テ守護ト被成嫡男甲斐



守長政閉ヶ原陣ノ時忠戦故筑前國主ニ成筑前守ト改長政  
家臣ヲ集メ關東へ下向スルヨリ生テ可帰覚悟ナシ唯義ノ  
赴ク處東軍ニ從ヒ志ヲ立ント思ハイカ、ト申サルレハ家  
臣ノ内黒田義作申ケルハ當分強シトテ義ナキ家ハ虎狼ニ  
ヒトシ武士ハ其惣大將ノ麾下ニメ義ニ死スルヲ以テ古來  
称羨スル也今 徳川殿義將ニテ天下ノ人多從フ間盛  
衰ヲトモニ寃メラルヘシ盛衰ハ必アリテ續ク程ハ續クモ  
ノ也亡時ハ鎌倉ノ北條九代諸國ノ一門五十日ノ内ニ七フ  
近代名家ノ大名断果タルモ皆天運ナルヘシ家ヲ起スニ至

テハ何程危キ軍シテモ秀ル丁ハ秀ルモノニ候僉儀ノ濃ナ  
ルト無穿鑿ナルトニ候盛衰與亡ハ大將ニ有テ家ニハ不依  
ト申ケルヲ長政感之黒田家毎月腹立シ講トテ日ヲ定メ家  
司ヲ始メ重職ノ衆寄合長政詞ヲ上テ誓テ后家司ヨリ一同  
ニ誓言メ面々力行非家中ノ善惡賞罰ノ丁互ニ心底ヲ不殘  
申イヤ左様ニカヤウニト互ニ意地ヲ立ル時ハ御誓言ニ候  
ソヤト互ニ諫メ平氣ニウツシ俗情ヲ去テ僉義スル故黒田  
ノ家今以此寄合不怠主人へ直ニ諫争申ス者モ咎メラレス  
役人モ互ニ吟味スル故依怙負ハ不成家風ト云長政關ヶ



原ノ御恩賞大名ニ成タレハ日光山石ノ大華表長政建立築  
前ヨリ石ヲ江戸迄運送子細ナシ江戸ヨリ日光迄ハ如何可  
遣坂山へ入テノ仕方ハ如何人カ及難ト申ケレハ長政聞  
テ愚ナル也江戸ヨリハ石一本ヲ舟ニノセ其左右ヲ大ヒ  
ラタノ虚舟ヲ漕セ陸地ハ修羅ヲ以テ牛數ヲ掛不勞ヤウニ  
牽スヘシ日光黒土故修羅メイリテ通ル間鋪猪料ハ支度ニ  
町ハカリモシカセ段々ニ繰越十ハサノミ難儀有ヘカラヌ  
其猪料ハ鳥居立ル足代ニ用笠石上ルニ上ケ様工夫スルニ  
其辺ノ余又ハ雜穀一テ買上コレヲ遠ク積上テ輓轆ヲ以テ

繰上ニハ人夫モ損スニシ其米穀ハ望者ニ取セハ此方ノ  
人ヲ勞スルニ不及ト始終ヲ考申サレシニ少モ違ヒナク古  
河ニテ川舟ニテ古河ヨリ修羅ヲ用橋々別ニ掛渡シ御山ニ  
メハ千ノ人夫ヲ以引上ルト也笠石モ俵ヲ積上ケ鍛ヲ掛テ  
其上ニ材木ヲ渡シ長政ノ積リノ如ク兩柱ヨリ高ク卷テ落  
入レタリケル長政ハ大器量有テ工夫巧者ノ人也関ケ原ノ  
后 當家ノ恩賞ニテ國主ト成タレハ二十万石ヲ以テ  
日光ニ華表ヲ作レハ我本望ト宣シ也

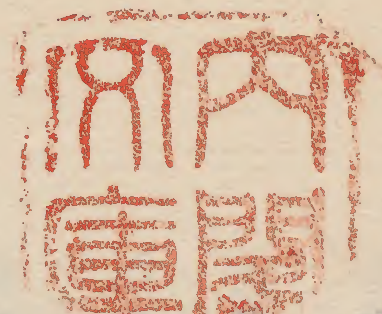
或曰如水死ニ臨テ長政ヲ召テ宣ケルハ世ニ親ニ生増タ



ルハ多クハ十キモノ也長政ハ親ニ生増タリ第一兩  
將軍ノ御心ニ叶今大國ヲ領ス我一生ノ間苦学ノモ祿中  
々其方ニ不及第二ニハ勇力武略モ勝シ大人數ヲ持我不  
及取也吾ニ生増タル數ハ多シ併我ニ劣タルヲアリ能聞  
其王へ我死タラハ家來百姓ニテ如水存命十ラハト我ヲ慕  
フ者多カラシ此所ハ中々不可及又我ハ天下一ノ博奕ノ  
名人ナリ時節モアラハ一博奕ト心掛タル也其方先カ見  
へ過博奕ハナル間鋪人也我一生ノ覚悟是ナリトテ錦ノ  
袋ヨリ草履斤々下駄斤々取出シ記念ハ是迄ソ心得ラシ

ヨト云置テ正念臨終スト云如水ハ仁慈ノ將ト云也又黒  
田左衛門佐忠之參勤ノ時駿河大納言忠長卿茶亭へ召與  
津河内守長規バカリ侍リ推テ誓紙ニ及ケリ異儀ニ及ハ  
、河内守耻見スヘキ模様ナレハ忠之判形ノ夫ヨリ下向  
シ我館ニモ不入直ニ酒井讃岐守カ宅ニ行直談ノ屋鋪ニ  
入是忠長卿御謀叛ト聞ヘタリ例ハ屋鋪へ到着上使ヲ待  
家ナレ氏密談ノ為直ニ忠勝ノ館へ参ル其后栗山大膳ト  
云家老我館ニ引籠リ結句諫争ノ臣ノ様ニ仕成數ヶ條ノ  
目安ヲ以江戸ニ言上申ケル左衛門佐忠之  
公儀ニ





對シ法令ヲ背シ更ニ多ク御前ニ召對決ノ赴ニ在ケレハ  
 忠之居屋鋪ヲ明ケ筭橋長谷寺ト云寺へ退テ御下知ヲ待  
 処ニ老臣思慮ニアクミ其頃天下一ノ思案者ト沙汰スル  
 人ハ尾州大山ノ主成瀬隼人正ヲ召黒田ハ大家ト云關ケ  
 原以來 當家ノ忠臣也栗山カ訟一ツモ忠之申訳十  
 シ忠之ニ一理アラハ栗山ヲ負ニ捌カント評義スレ凡一  
 理モナシ依テ召ス所也ト訴狀ヲ出ス成瀬訴狀ヲ見テ對  
 決ニ及フ栗山ニ尋ヘキハ主人ノ非ヲ舉吾切ヲ立ル天下  
 ノ不忠信モノ此理ヲ違ヒ言々皆空談ナルヘシ申訳アレ

ハ申サレヨト可申其時栗山返答ニ十ツム時引立ヨト下  
 知シ夕マハ、埒明ヘシト申サレ、故評定モ究リ栗山負  
 ニ成ル此義忠之利運ニ成長谷寺ヨリ登城ノ節急ニシテ  
 蓑箱等間ニ不合寺院ノ大竹ニ合羽ノ類結付持スト云此  
 時ヨリ一本道具ニナリテ右二本ニ不改トモ云今ニ黒田  
 家成瀬ノ家へ無如在ハ此故也忠之酒井忠勝ニ付テ家來  
 ト對決ノ筋名字ヲ穢シ候ヘハ唯切腹仰付ラレ候ヘト内  
 タ願申サレ、故へ忠勝黒田家ノ忠義悉言上アリシ故忠  
 之計御前ニテ栗山カ訴タル子細凡聞召被届栗山ハ酒井



忠勝家ニノ御食義埒明忠勝へ井伊掃部頭以下諸役人參  
會シテ栗山ヲ大書院ノ庭ニ引居サセ護政守忠勝上意ヲ  
申渡サレ大音声ヒ、キ渡ル様ニ云渡サレ御糺明ノ筋嚴  
命ヲ以テ科書セラル、仰渡サレ一ツノ御作法トカヤ左  
衛門佐忠之ハ開門ニテ身上無恙駿河大納言忠長卿ノ誓  
詞ノ注進宜ヲ以テ忠勝ノ取成モ聞召届玉フト云傳ル支

也

武家閑談

思田如あり慶長十九年三月廿日筑前守死志之付子息  
長好ノ邊ニ云あり世上ノ親女生れ増たるといふ

長好ノ親女増たるといふあり我が一ハ我ハ位長公秀吉公御意不  
遠ハ之度と云とてり過塞止れよと云は秀吉公 大御所様  
沖野子入湯前も能く仕事一は是也二ハ我ハ一生十二万石を以テ  
二十万石と云ふ中ニ我ハもよくけり御意一も方ハ自身此御  
意取の事名七八度仕物も毎度被り申し我ハ毎分列ありと云  
方と分別者中ニ我ハも方一人と持多しと云方ハ此御意  
忠之甲斐守長興也一助一人と男と持つと云も生息増たると  
云云と云方ハ我増たると事ニ云今我死すと十二万石の御意ハ  
中不及と云方ハ此家中の者も極く妙と云方ハ好生ありといふ此



幸の是子増へんとあけく愈一其方死して我生たしは左邊事  
如るは舟に不若とく力と為る者も海一人の思ひ付の所は  
其方の救ふに及事なすな一是其方人の善い徳也也と書次  
我の情乗よとて其方下の心も細い因て京海海の時  
大津所據

と信知かと百日お海らに能は案方切く登りし後お撲子入く天と奇  
石の時と秘羅也此一子其方おれは將殺一情乗子入んと思ひ  
しとて天と成る心者も親も子も顧くはなす一はけ情乗ハ其方  
中一我子及男也とて其方の守者古と少くハハぬ如水ハ小性成  
りて案の腹納小包くく物と看取一是ハ情乗物なりとて

案記の海ハ案腹くく一と本腹か一とた先案代めんはくく  
是と本腹子懐る軍ハ死生の境おれハ勿列する程大徳の合戦ハ  
親お物之弟腹くく一本腹か一とて二物うけよてるけれハ  
大合戦の思ひ切と親立其方の賢きお友んのおりては何と  
しとて大徳或意ハぬま一又けめんつうハ腹入之貴も親も  
各腹をりれハ何事もなす入する事ふ物と費さんより一之  
程とけく一我用意常くおととてその事と勿せんぬよきゆと  
之直終子懐之思く古と唱さぬ者はなかりりてとく如仁  
義ハうけて案子親者のお物之おそら一き一人也



續閑談

細川忠真入道之妹陣少左衛門長政之妻也いぬ一寺同守少左  
同此少左成馬少左衛門少左衛門の子也一寺出候者ノ善悪  
本と細く一様と云く石室よ志うけおぬ子孫上も口も  
皆相仲布之と所争勿備兼江戸もそもあうら之並成小  
柳は少左衛門のなき武將と云

古人物話

玉虫次郎右衛門二細川越中守逢候于物見二出候者ノ善悪  
何卜仕候于御見へ候ヤト被尋玉虫何卜申事無之功者不功  
者見へ申候越中守イヤ其分ニテハ合点不参候玉虫縦ハ御  
手前ノ小性共給仕致候割何卜申目利無之共功者不功者ハ

見へ可申候其如クニ御入候ト被申越州感悦スト也

老人雑話

細川兼仲守之妹終子我功者一俊信長死を此の甲斐  
西の合戦に能く陣とをなれりと大岡蔵員付一車のみ  
と云明智初と細川幽村の長なり幽村の家老弟田助を馬  
力と何〜〜何〜〜と云明智あ〜〜俊信長子ゆ〜子  
丹波一玉子首をを印を十石を而成を明智子云合〜米  
田々落〜と付候〜之被成替〜也

武家閑談

赤尾と兼頼代〜代老信長子赤尾長尾信忠信長信忠  
そ子細かな〜と云〜〜と云〜〜と云〜〜と云〜



時多岳の前へ出遊岳に何處か有る如く一人通りて  
彼子供くくり南の方行士如く山傳めとてとてとて  
彼子主者の振度と振て只一刀に刺殺して其血を  
赤尾に流し流し赤尾伊豆守と名乗る極度へ由系伊豆守  
大割の命を度々の多物多名を隠しなり一雲ヶ原沖降  
大津義城の村伊豆守御意一持度子十ヶ所切也と  
と見え人伝く一高所大津の住人にも老人も其村の  
伊豆守多物と傳く

明良洪範  
加藤嘉明 左馬介 始ハ少身ニメ后會津四十万石ヲ領ス智勇ニ

メ仁徳モ厚ク士民服シタル將也慶長年中ヨリ南京ヨリ渡  
ル所ノ成化年製ノ焼出セル類ヲ南京人商ヒ長崎ニ入津シ  
ケルヲ左馬介好テ多求メ秘藏セラル本南京ハ虫喰テ美麗  
ナル器ニ非ス新作深付ノ爵皿ヲ十宛揃へ調置テ珍客へモ  
テ十サレ、時近習ノ士一ツ取落シ割之右ノ者遠慮スル由  
ヲ聞テ早々呼出シ不苦事遠慮ニ不及ソ重テモ誰モ麩相ハ  
有ヘキ也割レ残りノ爵持來レトテ取寄悉ク碎キ捨テレ  
器物ヲ愛ル心カラテ士ヲ廉相ノ名ニ汚シタレ此鍾十ノ數有  
ル物ノ中何レノ年何某コソ碎キツレト此器物ノ出ル度ニ



其者ノ名ヲ出サシ事吾本意ニ非ス毛頭念テスルニ非ス我  
非ヲ改ル也トテ其后ハ器物ヲ愛スルヲセスト也嘉明ノ  
臣物語ヲ傳ル処也右ノ臣長野花一老人亦曰或時焼火ノ間  
ニ炭火アリ近士寄合火箸ヲヤキ灰ニ立置テ人ニ取セント  
ス其時喜明出テ火箸ヲ取ルキヨリ烟立ト云凡灰ニ一字書  
灰ニ指込置キ物語常ノ如クノ立ツ醫師ニ掛リ愈ルトイヘ  
凡終ニ僉義ナシ如何ナル故ニヤトイヘリ

或曰日本焼物ノ始ハ行基此業ヲ始テ尾刈瀬戸ニテ教之  
作始ル是始也故ニ皿鉢爵ヲ瀬戸物ト云也古ル瀬戸トモ

玩ヲ中ニ竄也ニテ碎磁有モノヲ行基ノ自作トテ殊ニ價  
ヲ高直ニ究ルト云南京ヤキ碗青ノ類錦手ノ類多ハ慶長  
年中ヨリ近年ノ事トナリ

續閑談

加茂左馬助豫別松山小左衛門の時茂堂より虎と今治より  
口より境自此神代編一加茂の境自の紫より身肉代在位  
せし。内記百世ノ子虎と氏と殺害の事虎怒く肉代  
其代ゆき決まるとして押寄る事况況一内記言なる冊  
一昔来りたる冊以来未だ昔めハ今迄紙眼あり事と殺さ  
くハ今迄之出物一々子虎と傍取とて其まゝとて脱



陣解成りハ河村権七未仕のりく家老の未仕ハ可也  
 リ流る只今出陣ハ里々夜堂ヲ勢押多る間ハ中ノ子  
 中ノ子今之第一風流ト云々夜堂よりいふ也一せぬ  
 けり出陣せむと云々怪しきものも公儀と怪しむ事あり  
 似たりも虎ハ公儀出陣の身ヲ保身も不之知危角矣  
 吾と申す處之後出ると云々一と怪し嘉明を云々  
 一りりも二時程と云々あの名虚説多々一因就角と云  
 源を云々果一と云々虎と云々助私の名額と云々陣解をハ  
 けり多しと云々據多しと云々かく出陣せむと云々けり多し

明良洪範  
 陣解

或曰朝鮮番船加藤喜明ノ午へ一番ニ乗取ヤウニ記録ニ見  
 エレ氏實ノ一番ハ藤堂新七良勝賣船ヲ貸リ催シ一番ニ押  
 カケ朝鮮ヲ追上ケ其舟凡ヲ乗取ル其后左馬介喜明ハ自身  
 ニ敵ノ鯨ヲ乗取レ故ニ一二ノ筆論出来レ氏新七良勝カ家  
 ニ傳ル書付ハ一番ハ良勝ニハ喜明ト見ヘタリト云云  
 又曰加藤喜明ハ秀吉公ノ扈從ニテ志津ヶ嶽七本鎗ノ一人  
 一己ノ働ノミカ衆卒ヲ目利シ忠義ノ士多ク武功ノ人ヲ持  
 レタリ或時平野權平喜明ニ向ヒ同七本鎗ノ列ニノ各トハ



格別也ト述懐シケレハ加藤平野カ耳ヲ取テ引官ト余慶ノ  
有ハ皆耳タフ次第ソ貴殿ノ武勇誰ニカ劣ラニ果報貧福ハ  
親ノ産付タル処耳タフソト坐興ニセラル平野カ不足ワル  
口モ云フ不成シテ止又文禄年中ニハ喜明水師ヲ承リ軍船  
ヲ下知シ大舟ニ乗掛ル喜明ノ小扈從ウテ鎡ヲ掛ント搦ヘ  
ケルユヘ制之乗付ハ跡ヘカヘルヘシニノミニウテ掛上レ  
ト下知スレ氏不聞メ打掛ル故舟ハリヲ踏ハツシ扈從ハ海  
中ニ落テ失セヌ申サヌ又カト云ナカラ喜明一番ニ乗移リ  
其大船ヲ乗取レヨリ人其功ヲ感シケル關ヶ原合戦ノ時武

者押ノ節結構ナル羨レイノ甲冑ヲ着シ青野原一戦ノ時ハ  
モトヨリ着シケル桃形ノ甲ニ黒塗ノ富士山ニ天人ノ蒔画  
ノ具足ヲ着替ルト是良將ノ機也 神君御馬印大旗ハ  
町先ニ押出サレタルモ喜明カ意モ符合スル所ト時ノ人云  
シト也関ヶ原ニテ上方勢ヲ膽吹山ヘ追上ケ逃登ル敵ヲ追  
ハセヌ也ヲ堅ク搦ヘタルヲ賞羨ス 神君モ感シ玉フ  
ト也今ニ加藤ノ家ニ天人ノ御具足トモ不二ノ御具足トモ  
云御家ノ重宝トテ有之由喜明ヘ父ヨリ譲ラレ志津カ嶽ニ  
着テヨリ戦場ゴトニ着ト云



感狀記

加藤左馬介喜明ノ曰氣サキノ勇ナル者ハ目ヲ驚ス程ノハ  
夕ヲキヲスルト云ヘ氏ツメタル武功ハ律義ナル者ニアリ  
敵地ノ中ニ援ナキ孤城ヲ守リテ屈撓ノ意ナク主人ノ威名  
ヲト口ヘテ皆ニ心ヲ懷氏獨節ヲ正シテ遷テサル此等ハ律  
義ナル者ニアラスハ難シト覺ユ又諛者ハ一旦拔群ノ勇ア  
リ氏侍ヘカラス諛テ寵ヲ偷禄ヲ得ルヲ後口指ヲサ、レシ  
トハ已モ能知之知テ自欺クハ耻ヲ省ヌ者ナリ耻ヲ省リミ  
ヌ者ハ主人ヲ裁テモ自利スル事ヲスベシ偽ト貪ト品カハ  
レ氏心ノ落著ハ同類ナルヘシ近來武名ヲ賣ノワタリ者根

本ノ忠義少シト見ヘタリ此ニ高知ヲ與ヘテ家ノ飾トスル  
ノ説有トイヘ氏良將ハ卻テ其家ヲ薄ク思フヘシイカニト  
ナレハ虚ノ實ニ勝故ナリ

勇士一言集

加藤左馬介のあひりといふ著記者を働と申し一りて持てけり

此天喜家此大月家老忠實のとのに格別の手事とある

明良洪範

奥州會津ノ城主蒲生下野守忠卿寛永四年病死ニ付此守護  
藤堂高虎ニ賜ルヘキトノ御事成シテ高虎堅ク辞シ奉リ上  
方何事モ候ハ、御先ヲ仕レト有テ伊賀伊勢ノ間ニ跨リテ  
在城被仰付タル某ニ候奥州會津ハ辺要ノ地帝以他人ニ仰



付テレ候ヘカシト言上アレハ又誰カ其方ニヒトシキ武勇  
忠實ノ器ハタソト御尋アリケレハ加藤左馬友喜明ヲ遣サ  
レ候ヘ當時彼ニ續ク者ハ候ハシト申上ル其後喜明ハ倍ノ  
御加恩ニテ會津ノ守護被仰付トキ高虎カ推舉ヲ申タル由  
ヲ聞テ兼テ朝鮮番舟ヲ乘取シ時一二ノ争ニテ遺恨ニ依テ  
今迄モ不通ノ家ナカラ今奥ノ鎮ノ樞會津ノ守護ニ我等ヲ  
申タテタル高虎志コソ耻シケレトテ先非ヲ悔テ和順有シ  
ト也高虎ハ吾ニ睦シカラ子氏篤義ナル人ヲ感シテ関ヶ原  
ノ后其節敵シタル大名ヲ多ク身ニ替テ申許シニケル亦戰

場討死ノ家來其者氏ノ名ヲ記寺院へ頼ミ追善廻向スルノ  
ミカ自ラ名帳ヲ旦夕ニ讀上ケ懐旧ノ志有ケル仁將トテ家  
士能思付テ忠義ノ士多カリシト云

續閑談  
友堂家の説ニ友堂高虎  
神君への忠勤地ニトスル

物中彼家より慶長十年始々家老の人質居上ケ徳家  
より長長此人質居上ケ成爲る毎日の所云上

権現様  
台徳院様事信容巧く同十一年分徳家の

若石澄人悉く江戸へ行くは長直は是も益進高虎等過  
野渥しといふ事



友堂和泉守苗裔の人とて法長成法少事大園此流り  
明成を者あまハ以明業と申さんとくそ産そ佩刀成  
何多ハ以先おまり一か〜と又我を〜甚と申色世人  
と〜か〜も止め〜り〜一度他はは〜又〜り〜れハ本  
初ハ成あ〜りの多〜り〜

感狀記

藤堂佐渡守高虎一ツノ箱ヲ造テ書院ニ置領國伊賀伊勢ノ  
士ノ殉死セシト欲ル者ハ姓名ヲ記テ此箱ノ中ニ入ヨトア  
リケルニ簡ヲ箱ノ中ニ入ル者四十餘人アリ其後駿府ニテ  
モ亦如此スルニ三十餘人アリ高虎此簡ヲ持テ登城シ臣カ

家人皆カヤウニ候是臣カ子孫ノ代ニテモ御先ヲ承ニ時御  
用ニ立者共ニ候願クハ以上意サシ止候ハントテ  
源君ノ御目ニカケ宿所ニ歸テカク思ヒ入タル上ハ殉死モ同  
莫ナリ  
源君ノ嚴命違カタシ必ス思ヒ止レト堅ク制  
セラレケルニ一人右ノ腕ニキヲ負テ不具ナル者アリ如此  
身ニ候間臣ハ別義ヲ以テ御免ヲ可蒙ト云  
源君聞召  
レ和泉我世々ノ先キ也下知ニ忤テ強テ殉死セントイハ、  
和泉カ先キヲ取アクヘシトノ上意ニ依テ彼者此上ハトテ  
止リ又高虎ノ先キ此事ヨリ始レリアル時高虎  
源君



ノ御座アリケル所ノ障子ヲ隔土井大炊頭利勝ニ對シテ我  
年老又我死セハ我子大學頭不肖ナリ大事ノ地ニテ候間速  
ニ國替ヲ仰付ラレテ可然候トソ語ラレケル利勝即チ台聽  
ニ達セラレ  
源君高虎ヲ召テ其故ヲ御尋アリ高虎伊  
賀ハ上國ニテ而モ國人勇氣ナリ毎ニ乘テ大和川ヲ下レハ  
夜中ニ人不知シテ大坂ニ到ル伊勢ハ近江山城ニ鄰リテ是  
又大坂ニ師ヲ出スニ便アル地ナリカ、ル國ヲ不肖ノ子ニ  
傳候ハニ交心モトナク候上意ヲ承リテ死セハ安堵可仕ト  
テ國ノ繪圖ヲ出サレケルヲ  
源君具ニ御覽セラレテ

是他人ヲ封セシ國ニ非ズ彼殉死セント謂シニ心ナキ者凡  
ニ守ラセハ何ソ思ヒヲ勞スル事アラニ代々伊賀ヲ不可易  
ト仰セラレ

武家閑談

加茂清正ハ昔此酒春と雖ハヤウとテ下ノ上戸と加守坂川  
忠多流大上戸 尚且トモ一滴も飲まぬと傳ふ清正と下戸と  
或時家中上下城々々料理成甚らけ坂川右且ト並テ  
玉座と云ふ事と云ふ所トテ飯と食上戸トテ大座より多ゆくと  
清く猪狼小直清正并也、酒成志いらく玉座と並酒成  
和久人并と云ふ清正と酒と河多今一々と此流坂川我



事と知れ玉座の御人並に大聖と云て一と云ふの御成  
此と云ふと云く初て他人の益かり事と云く益と云く

感状記

加藤肥後守清正母衣ノ者世人ヲ撰定ニ迎國中ノ士命シテ  
入簡ヲセサセラル箱ヲ作テ廣間ニ置各簡ヲ箱ノ中ニ投ス  
坂川忠兵衛ト云者アリ自姓名ヲ書テ入置タリ清正箱ヲ開  
テ見之大ニ異坂川ヲ書院ニ召テ家老皆左右ニ候シ其心ヲ  
詰問ル、二人ノ心ハ不可知候臣カ父御眼前ニテ二三度モ  
鎗ニ血ツケタル事候得共明日ノ首尾ハ又難計候父子ヨリ  
親ハ十ク又午ニ逢タル證據モ御座アリナカラ此ノ身體別

ナル故ニ子トシテ猶父カ心底ヲ不存候況ヤ他人ノ上ヲ母  
衣ノ者ニ宣シ共テハ申サレ、道理ニ非ス臣自省ルニ  
吾心ナレハ吾トヨク知テ候母衣ヲ預ケ下サレ其數ニ入候  
共其名ヲ不可辱候此故ニ自身ヲ申上ルニテ候ト色ヲモ變  
セズ云タリケレハ清正汝カ所言尋常ノ者ニ非ストテ即一  
倍ノ加増ヲアタエ六百石ニシテ母衣ヲ許サレタリ  
お慶清正の先此大將に表本候吉吏 三子名 坂田角清 店林隼人 三子名 坂田角清  
三宅角左衛門 三子名 坂田三宅 江戸におおく洋儀をくく信長小幡武蔵者雅  
くまといひし時清正の月坂田角清高き高藤より天下の人殺成



引也〜多れハ古今ノ稀ノ事ト云フ吉村吉忠ノ事ト云フ者也  
清正の内政實此者也

古人物語

加藤清正肥後天草退治一揆ノ時カタ鎌ユカムヲ鼻紙ヲナ  
ケ其上ヘ鎗ヲツキアテ、是ニテ踏直シテ又鎗ヲ合ス見事  
ナル事トイヘリ平野遠江守ソレヲ聞テ大身ナレハカヘ鎗  
何ホトモ有ヘシ踏ナヲサシヨリハ餘ノ鎗ヲ取テ又仕アワ  
セタラハ一日ニ何本鎗ヲ突折タルト云ヘシスレハフミ直  
シタルヨリハ二サレヘシト云云云云ナル事也大坂ヨリ前カ  
トニ清正云ケルハ加様ニ  
將軍ニナブラレ法度ニセ

セラレテハ後ニハ何トモナルニシ分別セハ今ナリ主三千  
ノ人数ヲツルヘシ福嶋ニ三千ノ人数ヲツレ一日替リニ上  
リタラハ池田等カ播磨國ヲハ其終ケテラスヘシ左アラハ  
大坂ヲ傾シモ年間入ニシ如何ト福嶋方ヘ云遣シケレ氏同  
心ナシ清正云ケルハ福嶋ハ小氣者ニテ用ニ立交ニテハ十  
キ者トイヘリト也又或時清正福嶋細川三齋牀ノフナヲ枕  
トシテ何カヲ咄ス清正ニ我々事ヲハ何ト云ソトアレハ清  
正云ケルハ細川ハ法度ツヨテ氣ノツテル事ト家中ノ者云  
福嶋ハサケ々手打ヲシテ油断ナラヌト云主人ハ人ヲ能見



知ユヘニ鈍ナル者合ス故ニ何トソレテ見カキラレヌ様ニ  
利口ニ見ヘラレタガルト云ヘリ總別大氣ナル大口人早業  
並ナシ高麗陣ニ小西撰津守ハ宗對馬守掎也案内者ヲソヘ  
テユキヨキ道ヲヤル清正ハ日本中山道ノヤウ成險阻ノ道  
ヘヤリケレトモ平路ヲ行タル衆ヨリハ三日早ク朝鮮ノ都  
ヘ入清正ハスサニシキ人也トナリ

明良洪範

肥後守

加藤清正 茶ノ湯スルトテ名物ノ茶碗ヲ飾リ置レケル

ヲ扈從共若年ノ輩見物スルトテ取落ウチ碎互ニ云合セ誰  
ト其人ヲ云ハシト申合ルヲ清正不知誰カ此茶碗ヲ割リタ

ルト尋ルニ云合セ故ニ且テ若年十カラ其人ヲ不云清正聞  
届ケヌ茶碗惜ニ非ス彼等カ切腹ニテモ云付ラレシカト余  
ヲ惜ミ隱スト思ハレ其日當番ノ小姓殘ラヌ呼若年十カラ  
臆病成者共哉武勇ノ父共カ名字ヲ汚ス口惜キ次第也割夕  
ルモノハ一人成ルヘシ申出サルコソ言語同断ナレト愈レ  
ケレハ加藤平三郎十四歳進出申ケルハ御吟味ノ上碎タルモ  
ノハ拙者ニモ被成ヨ一人ニテ候ヘ凡カク迄強御僉議アル  
ヘシ凡不存土器ニ士カヘ給フヘキ凡不思當人ヲ隱申ヘキ  
ト申合セテ候親共カ武勇戦功ヲ仰出サレ、ニテ猶以申出



シ難シ何モ御馬ノ先ニテ御用ニ立ヘキ命ヲ茶碗ニ命ヲメ  
サルヘキ御様子ナレハ弥申出間敷ト申上レハ清正モ理ニ  
セニリテコレヤク成小世忤ト云捨テ座ヲ立レニケリ荒大  
將ト云ヘ氏武ノ本意ヲ能弁テコソ五千石ヨリ一カイニ二  
十万石ニ成リ家來ヲ召抱ルニ名アルヨキ者多集メラレケ  
ルニテ其徳知ルヘキ夏ナリ朝鮮陣中秀吉公ノ許シモナキ  
ニ私トシテ姓名ヲ記メ筆談セシヲトカメ急ニ召大闇直ニ  
トカメ玉ニモ清正ノ正直ナル答某鄙賤ノ者故氏姓名不存  
去ナカラ小西ト某日本ノ惣先鋒トメ異國へ参テ唐人参會

ニ小西ハ藤原名乗申セトモ某ハ氏ヲモイカ、ト可書了簡  
ナク後日ノ御トカメハ無是非モ御姓ヲ犯シ申テ異國人ヲ  
モ威シ可申タメニコソト申ケレハ秀吉公機嫌コトニメサ  
コソ有ヘケレ 德川殿モ聞召セ彼ハ吾ラ同在所實ハ  
從弟ニテ候唯今コソ實姓同キ汝トハ申キカスレトテ名劍  
ヲタビテ暫ク逗留モナク亦渡海アリケル後々迄 神  
君ヘ一向ラ心ヲ寄せラレケルモカ、ル事ヲヤ思レケニ秀  
頼卿ヲ取立度志ニテヤ關東ノ異負有ケン石田が催ニ御下  
知モナキニ小西カ宇土ノ城ヲ攻取リ三成ヲ惡レシハ朝鮮



已來ノ家ヲ合ル家故也朝鮮ヨリ坂國石田三成諸侯列座ニ  
テ近日茶會ヲ催シ氣屈ヲ慰シト云ハ清正曰在陣七年瓶  
粟十ク囊ニ錢十シ故ニ茶モ十ク酒モ十ク唯稗粥ヲ以テ諸  
將ヲ饗セシト石田ニ答ラル或年ニ條城ニテ秀頼卿  
神君御對顔川舟ヲ清正奉リ淀迄召レ淀ヨリ二條迄ハ清正  
淺野左京大夫幸長兩人御兼物ノ左右守護ス義直卿尾州頼  
宣卿兩公達御迎ニ御出日傘ヲサシ掛ラレシヲ清正見トカ  
メテ傘ヲヒカセニイラスル杯秀吉公ノ旧思ヲ不忘古ヲ守  
ル、所也御城ニテモ股立ク、リヲ口サス御對面スムト直

ニ北政所へ入ラセラレ御膳ノ事アリ

神君モ成セラ

レ兩人長途ノ歩行ヲ慰セラレ古ノ御物語アツテ兩人カ誠  
忠ヲ感セラル清正ハ奥方徳川家へ縁アル故一入

神君モ御念頃ナリ此腹ニ男女ノ子ヲ設ナカラ奥方ニ入玉  
テハ刀ヲ少ノ間モハナサス膝ノモトニ横夕へ置レケルヲ  
人々不審シケレハ五條ノ局ト云ヘル老女申ケルハ表ニ一  
シテス時ハ御腰ノモノモ入ヘケレ奥へ入給テハ御氣遣モ  
ナキヲイカ成故ニヤト云ハ清正笑テ女ノ知ルヘキ事ニ  
非ス表ニテハ身ニ替リ命ニ替ル家來共多昼夜ノ守護ニ勤



番スル故ハ夕カニテ居レハトテ耻カク事ナシ奥方ハ女中  
ノツトヒ成レハ第一刀ヲコソ用心スヘケレト宣ヒシ是聞  
傳ケル士共難有事ニ思ケル亦先年ノ部將並河志摩加藤右  
馬中老庄林隼人森本義太夫飯田寛兵衛三宅角左衛門一騎  
當子ノ剛ノモノ侍座ノ時清正昔物語ノ序ニ辨慶ホトノ忠  
信勇者モ亦有カタカルヘシト被申レハ森本進出テ只今モ  
武藏坊ホトノ忠信勇者ハ何ニ人モ候半ニカ判官ホトノ大  
將カ御座アル間鋪トサシ返シテ申ケル笑テ居ル名將ト云  
ル、人ト皆々家頼ニハムワニシカリシ也古へ  
神君

モ鈴木三郎重家程ノ忠ト義ヲ兼タル士吾家ニモ多持タリ  
此小吉杯鈴木ニヲトラヌトノ神君御褒美也トカヤ  
良將ノ人ヲ進メテ能忠義ノ士ヲ求ル、ノ御心ハ一ツナリ  
陶淵明カ渠モ亦人ノ子也ト云シ格言大小貴賤ニワタリ良  
將ノ取玉ノ所也

飯田寛兵衛ハ六石ヲ賜ル所ニ后二十石ヲ賜リ部將ト成  
其后ニ清正ノ命ニ違ヒ浪人伏見ニ浪居馬ノ沓草鞋ヲ自  
作テ日ヲ送ル時ニ福嶋正則是ヲキ、四十石ニテ招之ル  
飯田固辞ス亦以使者念項ニサトス飯田難有事ナレトモ



吾六石賜輕モノ大祿ヲ賜永年ヲ許レ士大將ニ申付ラ  
ル事海山ノ厚恩今浪々仕ハ一身ノ不幸清正六石ニテ召  
返ハ立帰リ可相勤某也此后若シ五石ニテ召返スヘクハ  
御願ヲ申上可罷出唯今ノ通ニテハ二君ニ仕ル無所存明  
日ニモ清正出陣一番ニ走付討死仕リ厚恩ヲ泉下ニ報ス  
ヘキト覺悟仕ル旨ヲ返答スレハ正則深ク感之清正聞之  
召返二十石ヲ賜部將トス

生駒一正讚岐守慶長五年關ヶ原御合戦ノ時父雅樂頭上方ニ  
止リ嫡男一正ニ二十騎ヲ添關東ニ下シ吾ハ石田三成ニ組

シタル意ハ一正ヲ惡シ故親子ヲ分ケタルト云一正少勢故  
田中兵部大輔カ相備ニ被仰付一同ニ上ル一正吃ナリケル  
カ軍兵ヲ下知スル声少モ不滞忠義ノ將也一正カ嫡子ヲ父  
雅樂頭秘藏ノ丹後田辺ノ城攻ニモ一正カ嫡男左近大夫正  
俊ヲ將トメ大勢ノ家來ヲ付遣ス処關東御利運ニ成ル其後  
一正老父カ命ヲ願フ助置レ難キ者トイヘ凡嫡男一正カ功  
ニ依テ一命ヲ助ラル一正ニハ讃州ノ國主ニ被仰付此州水  
旱ノ二難不絶一正土地ヲ考一万石ノ水田ノ所深ク堀入レ  
テ國內ノ水ヲ落シ入ケル程ニ水損ナシ旱ノ年ニハ其地ヨ



リ龍骨車ヲ以テ水ヲ卷上サセケル故都テ凶年ノ難ヲ避ケ  
百姓悦フ程ニ俗ニ万能力池トテ今以湛水漫々タル深淵ニ  
成ルト也

武功實録

金森出雲守義濃郡上ノ後誥ヲイタサレ候時カ家來棚橋庄  
助賧ニ鎧疵ヲカフムリ勝イテタリ明日ノ働ノ夕メトテ疵  
ノ口ニ面桶ヲフセ繩ニテク、リ付置テ翌日イヨニツヨキ  
働ヲシテ高名ヲ致ス右ノ勝モトクト内へ入り平愈セリ庄  
从後ニ松平出羽守ニツカフ七十餘ニテ死去ス其子共親類  
ヲヨヒ寄セ某今日死スヘシトテ武功ノ心得十十ヲハナシ

キカセ某ハ死後ニカラタヲ人ニ見セン事イヤナリトテ大  
袋ヲ取寄内ニ入りサアロヲシメヨトテク、ラセ死申

感狀記

戸川肥後守安達カ家臣寺尾作左衛門ハ其頃稀ナル大力也  
一幸江戸ニ行時僕ト馬子ト爭論ヲシ出シテ僕馬子ヲタ、  
キ倒シケレハ其驛ノ馬子トモ百計相聚捧ヲフリ磔ヲ飛セ  
寺尾ヲ中ニ取コメテ怒リ旬ル處ヲ寺尾持鎗ノ松ノ二間餘  
リ七寸廻リハカリナルカ若馬子ヲ傷ツケタラハ後難アラ  
ント思ヒ身ノ方ヲ片手ニトリ以松脚ヲ拂ヒケルニ一拂ニ  
十人ハカリ打僵ス其氣勢ニ恐レテ逃散ケリ寺尾戯ニ奉ヲ



握り腕ヲサシ出セハ力疾出テ筋ハ篠ヲフセタルカ如シ細  
キ裏刺ノトキ立タルヲ三尺ホト上ヨリ落シカクルニ飛カ  
ヘリテ腕ニタ、ズ又縁ノ端ニ踵カケテ立タル所ヲ走リカ  
カリテ背ヲツクニ盤石ヲ立タル如クニテ其身少モ不動第  
ヲ七兵衛ト云五斗入俵一ツヲロニクワヘテ兩ノ脇ニ挟ミ  
ニツヲ足ニハキテ歩行ニカヲ出ス體ニ非スイカニモ安ラ  
カ也作左衛門ガカハ七兵衛ニ倍ス

續閑談

戸川肥後守秀安ハ生國佐後之父也門田玄叟定安と云戸川と  
改めし戸川氏と云れ秀安始平助と稱ハ父死して家妻へ

終五郎と云ふ子随ひて佐別少録き備列の浮田具中守  
仕へ身家没後息直家知少なり秀安是と補佐  
佐和佐伯那天神山此城主赤松の康統源宗宗氏收捕是  
より直家奮武威流し備前兵衛と願ひ秀安子  
備前守爲彦山の城と稱く天正七年直家備前守爲彦公  
を討秀安少中より流し某初尾毛利家の別当近曾孫と  
以て毛利一人質と爲ふ今彦是と悲く城田家へ属せり事  
可くはぬと云ふ秀安は曰某初曾孫と爲す可く是此  
大事ふくくはし不層必くくいふ事と云ふ事止と申り



不斗存身安國幸惠瓊の上事一りり決てるに在候に候  
呼寄息是成とて輝元の中き一終り彼人質戸川

源六 後稱師  
古事 と質者より一りり初て毛利勢戸川の居候と

攻る秀安と力此組以中傳左と忌山一与者一告

浮田も後信忠と一りり秀安に使曰唯暫人殺と出

尚候と殺陣と一給ふ趣きも以多勢出候り一欲

虚と多て忌山と可殺と云一故秀安候と女と多

一果一々中出此大軍一欲地も長陣も付圍と一紀

川右ぬ候とて直家没一其子八郎秀家初かたは下

直家才とと師基家と後見波知信小城郭きりりり

或時人殺三百斗とて殺地と巡見志りりと毛利勢合候と

直と殺とて殺以基家と以務抱持九ぬ秀安ハ在乃

城並信とて監事とて可と一々嫡子達安十一歳とて冷て是子

池是越我退返一々於世時秀安の殺以殺りり一使お

危う一ん付一殺とて毛利の大家一垣舟りり殺候も浮田家

合一其後豊后公明智為退治備中一帰一弟一弟一弟

誠前もと彼由候とて殺りりり候と秀安望く制

既子備前子入候とて一々一秀安以下此危居初と一



契つて申込ぬ豊長公別秀の家十歳未はるまは是城  
いふに〜必し聲とせんと物来〜備前北川口と曰ふ  
多し子謝〜是城也〜備前川と分く東九百石と  
加思可〜戸川秀安付付と通安と云り給ふ付付諱字と  
昔ひり給後信田八郎子は利家公の息女と書て大岡  
の舞多とせ〜北戸川〜天正十三年〜授子位の下と坪  
任〜りる依願氣居候者山の城〜隠居〜友林抄と  
号〜〜慶長二年六十歳〜〜年〜〜りる子卯七節  
達安と給之威の付天正七年小早川隆景備前北忍の城

と國〜信田忠家幸川意不出能合戦以達安も父と云り  
先父と〜〜秘伝孫丹後主と首と〜〜せりる豊長公の  
豊城攻の時も父と給ひ備中足守の山崎院と云毛利家の  
城と攻居〜ぬ付〜給六歳とて豊長公と謂〜前出田原氏  
没すも信田家北忍將と〜〜下向〜軍務の長成稱歎也  
ら〜利家根山平城考子後傳多〜〜造安安年と  
似〜一方北増と〜城名と〜城中方石陣と〜付事此  
外忠惑〜〜りる〜程も城た〜と〜人〜其内城考〜  
同〜從五位下紀房と〜城朝鮮陣中造安と功法録子見











う妻如く光宗と云老人許さる長宗の伯父と長宗の母なる成  
 尼て云是に長宗の妻と長宗の母なる成尼と云は異なりと遊  
 びてと知れぬなり長宗の  
 東恩美沙忌志の事ありに  
 長宗の身上危しと人留りて秋改易せらる  
 権理漢  
 長宗の母上流なり時宗の母上流なりと云て

古人物語

關ヶ原

- 一 清洲 御味方 福嶋左衛門大夫 三万石後六十五万石
- 一 大柿 福原右馬助
- 一 佐和山 石田治部少輔

- 一 水口 長束大藏
- 一 郡山 増田右衛門尉
- 一 岡崎 御味方 田中兵部少輔
- 一 吉田 御味方 池田三左衛門
- 一 大家老
- 一 井伊兵部 榊原式部 本多中務
- 一 御家老
- 一 酒井左衛門 石川伯耆守 酒井與四郎 天野三郎兵衛
- 一 本多作左衛門 高力權左衛門 本多佐渡守



本多上野介弥八

御出頭人

加々凡隼人

高木九助

大久保十兵衛

伊奈熊藏

板倉四郎右衛門

加藤喜左衛門

一 台徳院様

大久保相摸守

酒井雅樂頭

本多佐渡守

青山常陸介

内藤修理亮

土井大炊頭

安藤對馬守

青山圖書

一 權現様御他界以後

井上主計頭

永井信濃守

青山大藏

森川出羽守

一 大猷院様

酒井備後守

青山伯耆守

内藤若狭守

酒井讃岐守

内藤伊賀守

大草七兵衛

稻葉丹後守

土井大炊頭

永井信濃守

青山大藏

松平伊豆守

堀田加賀守

阿部豊後守

阿部對馬守

若年寄

三浦志摩守

太田備中守

土井遠江守

酒井備後守

朽木民部少輔

一 當將軍様



一 牧野内匠頭

松平和泉守

阿部豊後守

酒井讃岐守

松平伊豆守

酒井雅樂頭

稻葉義濃守

久世大和守

土屋但馬守

板倉内膳正

若年寄

一 土井能登守

永井伊賀守

堀田備中守

一 台徳院様真田出張時七本鎗ノ衆

中山勘解由

太田善太夫

朝倉藤十郎

鎮目市左衛門

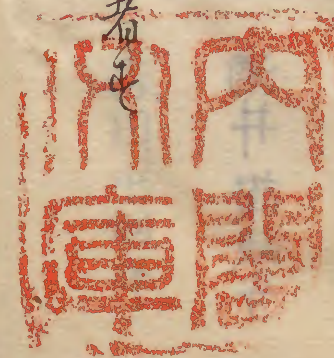
一 小野次郎右衛門

戸田半平

辻忠兵衛

一 大正九年七月八日土月三詣由ノ札付是ノ末小著

私云



武徳成業卷之四十五終







